

# 老年看護学における看護学生の看護倫理教育に関する研究の動向

堀田涼子 今野あかね 平井佳代 吉田直美  
(Ryoko HOTTA, Akane KONNO, Kayo HIRAI, Naomi YOSHIDA)

## 【要約】

《目的》老年看護学における看護学生の看護倫理教育に関する文献検討から、教育内容と教育効果の特徴を明らかにし、今後の課題を考察する。

《方法》医学中央雑誌web版Ver.5にて「老年看護」「教育」「倫理」をキーワードとして検索した国内文献を対象とし、教育内容と教育効果を分析した。

《結果》10件の文献の発行年次や研究概要と研究方法、教育目的や教材と方法、教育効果について分析した。その結果、1・2年次に高齢者を対象とした倫理に関する講義や演習を通して倫理観を涵養し、3・4年次の臨地実習を通して、高齢者の倫理的問題に気づくことができる能力の育成に繋がっている可能性が示された。

《結論》倫理的能力の育成に向け、看護基礎教育で修得した看護倫理に関する基礎的な知識をもとに、高齢者に特化した倫理的問題へと学習を積み重ねていくための4年間の連続した教育と、倫理的問題に取り組むための方略に関する教育の充実が必要であると考えられる。

キーワード：老年看護、看護倫理、倫理教育、看護学部教育

## I. 緒言

超高齢社会における医療や介護への需要の増加、医療の高度化・複雑化、国民の医療に対する権利意識が高まる中で、高齢者施設における虐待や、入院治療に対する理解が困難な認知症高齢者の身体抑制など、高齢者の倫理的問題に対する指摘がなされている。そのため、看護職者は患者の尊厳を尊重した安全・安楽なケアを提供すると同時に、高齢者の人権や権利を擁護し代弁する役割を果たすことが求められる。看護基礎教育課程においても、「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」で看護倫理教育が強化され<sup>1)</sup>、改正カリキュラムにおいても、教育の基本的な考え方として、「看護師としての責務を自覚し、対象の立場に立った倫理に基づく看護を実践する基礎的能力を養う」ことが掲げられている<sup>2)</sup>。大学における看護系人材養

成の在り方に関する検討会でも、倫理的な看護実践が重要な要素として位置づけられている<sup>3)</sup>。また、「ヒューマンケアの基本に関する実践能力」として、看護の対象となる人々の尊厳と権利を擁護する能力を看護学士教育におけるコアコンピテンシーのひとつと設定し、人権の尊重と看護倫理に関する卒業時の到達目標が明示された<sup>4)</sup>。そのため、それぞれの教育機関が、看護倫理のカリキュラムや学習時期、教授方法等の検討を行っている現状にある。

看護倫理教育に関する研究を概観すると、倫理的問題に対する感受性を高め、倫理的判断及び決定のできる能力を育み、説明責任のとれる倫理的意思決定能力が育つような看護倫理教育の体系化の必要性が指摘されている<sup>5) 6)</sup>。しかし、看護倫理教育を展開する方法論の具体や、段階的・継続的なカリキュラムとしての展開がなされておらず<sup>7)</sup>、講義から演習、臨地実習へ

ほったりょうこ：目白大学看護学部看護学科  
このあかね：目白大学看護学部看護学科  
ひらいかよ：目白大学看護学部看護学科  
よしだなおみ：目白大学看護学部看護学科

と統合された教育の重要性が指摘されている<sup>8)</sup>。こうした点について植村・大島(2016)は、学生の倫理的な看護実践のためには、学内での学びを実習に適用させていくだけでなく、学生が看護学実習で捉えた倫理的課題を学内に持ち帰り分析し、学びを振り返る教育実践の重要性を指摘している<sup>9)</sup>。つまり、倫理的問題に対する感受性を高めることを目的とした系統的な講義や演習による教育効果を、臨地実習および臨地実習後の看護倫理教育へと繋げていく教育体制や教育方法の充実が必要であると解釈できる。

植村・大島の臨地実習における看護倫理に関する研究対象別分類では、看護基礎教育全般が106件(36.9%)と最も多く、次いで精神看護学31件(11.1%)、小児看護学22件(7.7%)であり、老年看護学は10件程度であった<sup>9)</sup>。しかし、老年看護学実習は他実習に比べてジレンマを抱く件数が最も多く<sup>8) 10)</sup>、学生が抱くジレンマは食事、排泄、入浴等の日常生活への援助場面での看護職としての基本的態度に関する内容が主であったことが明らかにされている<sup>10) 11)</sup>。こうした背景には、実習中に学生がモデルとする看護師であっても、高齢者に日常生活援助を行う上で、高齢者の日常性を重要視するという価値観と業務中心の価値観、高齢者の能力の信頼を前提とする実践と高齢者の意思と自立が尊厳されない実践におけるジレンマを抱いている<sup>12)</sup>ことが、影響している可能性が考えられる。特に高齢者は、身体機能や感覚機能、コミュニケーション機能などの低下によって、基本的欲求を満たすために他者の助けが必要になることや、認知症によって同意能力が不十分とみなされるなどの要因によって、権利や尊厳が守られにくい状況に置かれている<sup>13)</sup>。日本老年看護学会による「急性期病院において認知症高齢者を擁護する」立場表明<sup>14)</sup>や、日本老年医学会による「高齢者の終末期医療およびケア」に関する立場表明<sup>15)</sup>が示すように、認知症などによって権利の表明が困難になったとしても、高齢者自身の意思が尊重され、尊厳が守られることが医療における大前提である。そして、虐待などによる生命の質、意思が尊重されない日常生活援助や身体拘束による生活の質が脅かされることなく、最期の瞬間まで、必要とする権利の行使やニーズの表明が高齢者自身の思いに添ってなされていくよう支援し、代弁者としての役割を果たしていくことが、看護職者の倫理的責任であると考えられる。看護学教育モデル・コア・カリキュラムにおけ

る、老年期にある人々に対する看護実践においても、高齢者の尊厳と生活の質を支える看護について考察できることが、学修目標のひとつとして挙げられている<sup>3)</sup>。また坪井(2008)は、高齢者看護の実践能力を構成する項目のひとつとして「倫理的基盤に則り、高齢者個々の人権を擁護し、意思決定を支え、その人らしい生き方を支えることができる」ことを提起している<sup>16)</sup>。

以上より、高齢者に倫理的問題が生じやすい背景には、加齢に伴う身体・心理・社会的変化により、高齢者の意思決定や権利の表明が困難になること、高齢者に対するスティグマ、エイジズムが存在することに加え、看護学生にとっては高齢者になることが未知の体験であること<sup>17)</sup>が存在している。それ故に、老年看護学実習で看護学生が倫理的問題に対峙することが多く、倫理的なジレンマの解決に向けた困難さを抱いている可能性が考えられる。つまり老年看護学においては、生命や生活の質が脅かされるような虐待や身体拘束、高齢者の意思が尊重されないケアなどの倫理的問題に対する感受性を高め、最期の瞬間まで、高齢者の意思や自律、価値を尊重した倫理的な判断ができる能力を育めるような教育の強化が重要な課題である。

そこで、このような教育を行っていくために、老年看護学領域の看護倫理教育では、どのような教育目的を掲げ、教育内容が実践されているのか、そしてどのような教育効果が得られているのか、その特徴を明らかにし、教育の質の向上に向けた今後の課題を考察する必要があると考えられる。

## II. 目的

老年看護学における看護学生の看護倫理教育に関する文献検討から、教育目的や教育内容と教育効果の特徴を明らかにし、今後の課題を考察する。

## III. 用語の定義

### 1. 看護倫理

看護倫理は、「看護職者が患者に見合うよりよい実践をする上での普遍的な規範」<sup>18)</sup>であり、「看護(実践)において正しいことは何か、どうすることがよいことなのか、看護者として私は何をすべきかを問い、これに答える営みである」<sup>19)</sup>と定義する。

## 2. 看護倫理教育

看護倫理を教授する目的で行われている教育活動と定義する。

## IV. 研究方法

### 1. 分析対象論文の抽出

本研究の対象は、看護基礎教育課程の学生を対象とした老年看護学における看護倫理教育についての研究論文である。具体的には、医学中央雑誌web版Ver.5を使用し、検索年次を制限せず、「老年看護」「教育」「倫理」をキーワードとして、原著論文を指定して検索した。2021年1月15日時点で検索された文献50件の論文の題名、抄録を精読し、教育に関連しない文献や看護学生を対象としていない文献は除外し、研究目的である老年看護学における看護倫理教育を主題とした研究文献に限定し、抽出された文献10件を本研究の分析対象とした。

### 2. 分析方法

抽出した研究論文を精読し、文献の発行年次や文献概要、研究内容について吟味した。さらに、老年看護学の講義・演習と、実習に関する研究の2つに分類し、看護倫理教育の教育内容として対象学生、教育の目的、看護倫理に関する枠組み、教材、教育方法について、教育効果として教育効果の測定方法と教育効果について分析した。

### 3. 倫理的配慮

すでに公表された論文を使用して分析、考察を行った。文献の引用にあたっては、著作権法に則り著作権を侵害しないよう、原文を適正に引用した。

## V. 結果

### 1. 老年看護学における看護倫理教育の研究の動向

本研究の対象論文の発行年次は、表1に示す通り、2001年～2005年2件、2006年～2010年4件、2011年～2015年1件、2016年以降3件であった。研究デザインでは、量的研究が2件、質的研究が8件であった。

### 2. 老年看護学の講義・演習を通しての看護倫理教育

老年看護学の講義・演習を通しての看護倫理教育に関する文献は5件であり、詳細は表1・2に示す通りである。

対象学生は2年生が3件、1～3年生が1件、不明が1件であった。看護倫理教育の目的は、高齢者の対象理解や高齢者の立場に立って考えること、高齢者をいたわり、その人らしさを尊重した対応ができること、認知症高齢者や寝たきり患者、高齢者虐待など、高齢者の人権や尊厳を侵さないための基本的な姿勢を培うことであった。なお看護倫理に関する枠組みを活用している研究はなかった。教材と教育方法については、講義のみ1件、他の研究者が作成した紙上事例が1件、当事者の参加による体験授業が1件、自作した紙上事例もしくは模擬患者による演習が2件であった。具体的には、寝たきり患者や重度の認知症高齢者、高齢者虐待などの紙上事例、高齢者疑似体験や身体抑制などのシミュレーション演習、認知症高齢者の模擬患者の参加による演習であった。

看護倫理教育の効果については、研究者が独自で作成した質問紙による量的な検討や、レポートの記述内容を質的記述的に分析することで、教育効果を測っていた。具体的には、倫理観を基盤とした内省的思考をすることによって、抱いていた高齢者のイメージや偏見を一新させることや、高齢者の力や創造力を知り、高齢者への尊厳を抱くなどの倫理の深まり<sup>20-24)</sup>、寝たきり患者や重度の認知症高齢者の尊厳を侵さないための関わりが考察でき、倫理観の涵養に繋がったことが明らかにされている<sup>24)</sup>。さらに、看護倫理教育の課題として、学生が認識した自己の課題がその後の臨床看護の実践においてどのように達成されていったのか、臨地実習評価に高齢者の尊厳、倫理観を涵養する評価項目を入れるなど、継続した教育的介入の必要性が示唆されている<sup>24)</sup>。

### 3. 老年看護学臨地実習を通しての看護倫理教育

老年看護学の臨地実習を通しての看護倫理教育に関する文献は5件であり、詳細は表1・3に示す通りである。

対象学生は3・4年生であった。看護倫理教育の目的は、学生の体験をもとに倫理的問題に気づく力を育てること、看護者として必要な倫理的判断能力や高齢者



の人権と権利擁護について学びを深めることであった。看護倫理に関する枠組みは、看護者の倫理綱領が2件、サラフライの倫理原則が1件、記述なしが2件であった。教材と教育方法は、老年看護学実習中に体験したジレンマを記載する記録や高齢者の人権と権利擁護を検討することを目的としたワークシートの活用がなされていた。

学生が倫理的なジレンマを抱いていた内容は、アセスメント力や技術不足、対応の困難さを実感し、看護ケアを拒否された場面といった学生自身の課題、看護者の患者への不適切な言動や、入浴や排泄といった日常生活援助の場面で、高齢者の尊厳や権利、自律が侵されやすい状況に気づくなど、看護職としての基本的態度に関するジレンマを抱いていた<sup>25-29)</sup>。そうした倫理的なジレンマに直面する中で、ジレンマの日記を書くことが、学生にとって倫理的問題を意識させ、冷静に状況を見つめ直し、自分はどう行動できるかを考える契機になっていたと論じている<sup>25-28)</sup>。加えて大畑(2007)も、患者に看護ケアを拒否された場面に倫理的なジレンマを感じているものの、ワークシートを活用して体験を再構成することで、全ての看護実践には倫理的な配慮が伴うことへの気づきを得ていたと論じている<sup>26)</sup>。しかし、ジレンマの状況的な文脈の吟味が出来ず、倫理原則の背反を問題視する傾向が推察されるため、単に医療者を批判し、一面的な背景要因だけに留まらず、状況的文脈や背景について、知識や看護の原則で理論的に場面を組み立て、その状況を倫理的な観点からアセスメントできるような支援と、倫理的問題やジレンマを体験した学生同士の意見交換をもつことが、問題意識を持って実習に取り組み、倫理的な感受性を高めることに繋がると指摘している<sup>25-28)</sup>。

## VI. 考察

### 1. 老年看護学の看護倫理教育に関する研究の特徴

植村・大島(2016)は、過去10年間の看護学実習における看護倫理に関する文献検討において、2005年の43件が最も多く、次いで2008年の35件、2013年の33件であり、研究対象別分類では、看護基礎教育全般が106件(36.9%)と最も多く、老年看護学は10件程度であったことを明らかにしている<sup>9)</sup>。本研究結果においても、発行年は2004年から2018年であり、件数は10件と少ない結果であった。こうした点につ

いては、2003年に日本看護協会の「看護師の倫理綱領」が改訂され、2005年には「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」が成立したことから、社会的に高齢者の権利擁護や看護師の倫理的な態度について注目され始めた。さらに、2007年より「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」で看護倫理教育が強化され、2011年に大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会でも、倫理的な看護実践が重要な要素として位置づけられており、看護基礎教育課程における看護倫理教育の必要性の高まりが文献数の増加に影響したと推察される。日本老年医学会<sup>15)</sup>や日本老年看護学会<sup>14)</sup>による高齢者の権利擁護の立場表明をしていることが示すように、特に高齢者は権利や尊厳が守られにくい状況に置かれる可能性が高いため、高齢者の権利や尊厳を保ちながら、その人が望む生活が送れるような支援を思考できる学生の育成に向け、高齢者の看護倫理教育に関する研究を継続的に積みかさねていく必要がある。

研究デザインは、量的研究が2件、質的研究が8件であった。量的研究では、研究者が独自に作成した質問紙を使用しており、研究が蓄積されにくい状況に繋がっていると考えられる。質的研究においては、学生が体験したジレンマやその場면을学生自身が客観的に考察し、解決策を模索することが、学生の倫理的な感受性や判断能力の育成に繋がることが示唆された<sup>25-29)</sup>。今後も高齢者に対する倫理的な感受性を高め、状況的文脈や背景を倫理的な観点で理論的に考察していくプロセスを明らかにしていくとともに、その中で倫理的な感受性や判断能力がどのように成長しているのかを検証していく研究を蓄積していく必要があると考えられる。

### 2. 老年看護学領域における看護倫理教育の課題

#### 1) 倫理的能力の育成に向けた4年間を通しての連続したカリキュラムの充実の必要性

看護基礎教育における看護倫理教育においては、倫理的問題に対する感受性を高め、倫理的な判断および意思決定ができる能力を育むことが求められる。その中でも老年看護学においては、高齢者看護の実践能力として「倫理的基盤に則り、高齢者個々の人権を擁護し、意思決定を支え、その人らしい生き方を支えることができる」能力の育成が課題となる<sup>16)</sup>。そうした観点で研究結果を概観すると、まずは1・2年次に講

義や演習で高齢者の権利擁護、尊厳を犯さないための関わりを考察することを通して倫理観を涵養する。そして、3・4年次に臨地実習を通して、学生が対峙している倫理的問題やジレンマについて、ワークシートを活用して場面や状況を再構成することで、自分はどう行動できるかを考えるなど、学生個々が感じる力を育てることに繋がっていたことが示された。

Gallagher (2006/2008) は倫理的能力として、「知ること (倫理的能力の知識面の促進)」、「見ること (倫理的能力の知覚面の促進)」、「振り返ること (倫理的能力の内省面の促進)」、「行うこと (倫理的能力の行動面の促進)」、「あること (倫理的能力の資質面の促進)」を挙げ、倫理的能力は連続した発達プロセスであるとしている<sup>30)</sup>。この順序性でみると、1・2年生に高齢者を対象とした倫理に関する講義や演習を通して「知ること」、3・4年生での実習を通して「見ること」「振り返ること」によって、倫理的能力の育成に繋がっていると解釈できる。その一方で、学生が認識した自己の課題がその後の臨床看護の実践においてどのように達成されていったのか、臨地実習評価に高齢者の尊厳、倫理観を涵養する評価項目を入れるなど、継続した教育的介入の必要性についての課題も導き出された<sup>24)</sup>。

看護倫理教育のカリキュラムを検討している習田・志自岐 (2005) は、1年次から2年次の講義で看護倫理に関する基本的知識を学習し、倫理に関する知識を実習で自分が体験した看護現象と統合させる、2年次後期から3年次後期で対象のライフサイクルの特性を考慮した倫理的課題を学習し、実習で倫理的課題についての考察を深める、4年次の「看護倫理学」で学生が関心を持った事例を倫理的観点から論議、分析し、意思決定を行うことを通して、倫理的判断能力の育成を図っていることを指摘している<sup>31)</sup>。

本研究の分析の結果、看護倫理に関する枠組みとして、看護職者の倫理綱領とサラフライの倫理原則が活用されていたが、対象文献10件のうちの3件のみであり、講義・演習においては記載されていなかった。また老年看護学のテキストにおける看護倫理については、看護者の倫理綱領や倫理に関する理論よりも、高齢者の虐待や身体拘束についての記述が多くなされている<sup>32-40)</sup>。そのため、1～2年次に看護基礎教育で倫理原則等の基礎的な知識を学習し、修得した知識を再学習しながら、高齢者に特化した倫理的問題へと学習

を積み重ねていく必要がある。つまり、さらなる学生の倫理的能力の育成を図るためには、4年間を通して発達プロセスを育めるような連続した看護倫理カリキュラムの充実が重要であると考えられる。

## 2) 老年看護学実習で直面した倫理問題を客観的に洞察する教育方法の検討の必要性

看護倫理教育において大日向 (2005) は、看護実践に内在する矛盾を解明し、行為の是非を判断し得る思考力を育成することの重要性を指摘している<sup>41)</sup>。こうした点については、ジレンマ日誌などのワークシートの活用は、冷静に状況を見つめ直し、自分の行動を考える契機となり、看護実践には倫理的な配慮が伴うことへの気づきに繋がっており、臨地実習で直面した倫理的問題の状況を分析・整理するという点において有効であったことが示された。しかし、Gallagher<sup>30)</sup>が提示した倫理的能力のうち、「行うこと (倫理的能力の行動面の促進)」、「あること (倫理的能力の資質面の促進)」の倫理的能力の獲得について検討している研究論文はなかった。そのため、ジレンマを克服し評価する段階に至るために、学生が考え、行動する力をいかに育成していくのかといった具体的な教育方法について明らかになっていないのが現状である。また、老年看護学実習において学生が抱くジレンマは、医療看護体制に関することが主であるが故に、学生は倫理原則の背反を問題視するなど、状況的な文脈の吟味が出来ず、一面的な背景要因の考察に留まる可能性が導き出された<sup>25-28)</sup>。

つまり、実習期間中に倫理的問題に対峙し、ジレンマに気づくことができたとしても、看護基礎教育課程にある学生が実習期間中に、倫理的問題の背景にある状況や要因を分析し、その結果として導き出した看護を実習施設内で実践するまでに至ることは困難であると考えられる。そのため、老年看護学実習における高齢者との関わりを通して、倫理的問題やジレンマに対峙した際に、単に医療者を批判するのではなく、どのような方法や手段を活用することで、倫理的な分析をすればよいのかといった、実習後の具体的な教育方法を検討していく必要がある。そのためには、講義から演習、臨地実習へと統合された教育と、臨床現場での教育方法の工夫が重要となる<sup>7)</sup>。加えて習田・志自岐 (2005) は、実際に受け持った対象のケアを行う過程で十分考えたり、対応までいかなかった道徳的葛藤や

ジレンマを卒業前に吟味することは、学生の倫理的判断能力を育成し、強化することに繋がると論じている<sup>31)</sup>。このように、実習で直面した倫理的問題を、改めて学内で振り返り、理論的に場面を組み立て、揺らぎが生じている理由や、多側面での背景要因を探求し、問題を客観的に認識できるような教育の充実が必要であると考えられる。

### 3) 高齢者の倫理的問題に取り組むための方略に関する教育の必要性

本研究の対象論文は、実習での体験や紙上事例等を通して直面した倫理的問題をワークシートやレポートで振り返り、看護実践には倫理的な配慮が伴うことへの気づきや、倫理的問題の状況を分析・整理することに繋がっていたことが示された。高齢者の看護倫理における研究動向と課題を検討した古田ら（2020）は、看護師が実践を行う中で直面する倫理的な葛藤やジレンマの要因を明らかにするまでに留まっており、ジレンマに対するアプローチまでには至っていないことを明らかにし、看護師自身が自己努力でジレンマと向き合っている現状を論じている<sup>42)</sup>。さらに老年看護学のテキスト9冊<sup>32-40)</sup>を見てみると、ほとんどが高齢者の権利や尊厳を守るアドボケートとしての看護師の役割を述べるに留まっており、倫理的問題に取り組むための方略について論じているのは、事例を生命倫理4分割法や倫理原則を活用して解説を行っている2冊のみであった<sup>32) 33)</sup>。高齢者の医療が高度化する中で、身体機能やコミュニケーション機能の低下、認知症などによって、高齢者の意思や権利が守られにくい日常生活援助や、意思決定支援が必要な場面など、高齢者の尊厳に関わる倫理的問題に遭遇する機会が多くなっている。そのため、倫理的問題に対する感受性を養うとともに、倫理原則や生命倫理4分割法等の知識を活用した、高齢者の倫理的問題に取り組むための方略についても教育していくことが必要であると考えられる。

## VII. 結論

老年看護学における看護学生の看護倫理教育に関する研究動向を分析した結果、高齢者を対象とした倫理に関する講義・演習に関する文献と、老年看護学実習に関する研究の二つに分類された。そして、1・2年次に講義や演習を通して倫理観を涵養し、3・4年次

の臨地実習を通して、高齢者の倫理的問題に気づくことができる能力の育成に繋がっている可能性が示された。しかし研究数が少ないため、倫理的問題を理論的に考察していくプロセスや、倫理的感受性や判断能力の成長を検証していく研究の蓄積が必要である。

また、さらなる倫理的能力の育成を図るためには、看護基礎教育で修得した看護倫理に関する基礎的な知識をもとに、高齢者に特化した倫理的問題へと学習を積み重ねていくための4年間の連続した教育と、倫理的問題に取り組むための方略に関する教育の充実が必要であると考えられる。

## 【文献】

- 1) 厚生労働省：看護基礎教育の充実に関する検討会報告書，掲載日2007年4月20日。[https:// www. mhlw. go. jp/ shingi/ 2007/ 04/ dl/ s0420- 13. pdf](https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf)（閲覧日2019年8月7日）
- 2) 厚生労働省：看護基礎教育検討会報告書，掲載日2019年10月15日。<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>（閲覧日2021年11月3日）
- 3) 文部科学省：看護学教育モデル・コア・カリキュラム，掲載日2017年10月31日。[https://www. mext. go. jp/ b\\_ menu/ shingi/ chousa/ koutou/ 078/ gaiyou/ 1397885. htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/1397885.htm)（閲覧日2020年8月7日）
- 4) 日本看護系大学協議会：看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒時到達目標，掲載日2018年6月。[https://www. janpu. or. jp/ activities/ report/](https://www.janpu.or.jp/activities/report/)（閲覧日2020年8月7日）
- 5) 志自岐康子：看護基礎教育における倫理教育の在り方—現状と今後の課題。関西看護医療大学紀要7（1），3-11（2015）
- 6) 清塚智明：看護基礎教育における看護倫理学の現状。八戸学院大学紀要56，127-131（2018）
- 7) 高橋衣：過去5年間の看護系大学における「看護倫理」教育に関する文献検討。東京女子医科大学看護学会誌16（1），81-89（2011）
- 8) 木下香織，栗本一美，金山時恵，白神佐和子，太田浩子，真壁幸子，福原博子，土井英子，古城幸子：看護倫理教育と看護学生の看護ジレンマに関する研究の動向—ライフコース研究会での取り組み。新見公立短期大学紀要25，143-153（2004）
- 9) 植村由美子，大島弓子：過去10年間の看護学実習における看護倫理に関する文献検討。豊橋創造大学紀要20，35-45（2016）
- 10) 白神佐知子，木下香織：臨地実習での学生の看護ジレンマ（第2報）事例分析による教育的対応の検討。看護・保健科学研究誌5（2），41-46（2005）
- 11) 栗本一美，古城幸子，太田浩子，金山時恵，真壁幸子，杉本幸枝：臨地実習での学生の看護ジレンマ（第2報）事例分析による教育的対応の検討。看護・保健科学研究誌5（2），41-46（2005）



- 12) 荒城慈, 永田美和子, 松田めぐみ, 前上門ルミ: 高齢者を対象とする日常生活援助における日常倫理に関する研究の動向。名桜大学総合研究27, 81-95 (2018)
- 13) 日本看護倫理学会: 看護倫理ガイドライン。18-19, 看護の科学社 (2018)
- 14) 日本老年看護学会: 「急性期病院において認知症高齢者を擁護する」日本老年看護学会の立場表明2016, 掲載 日2016年8月23日。http://184.73.219.23/rounenkango/news/news160823.htm (閲覧日2020年8月7日)
- 15) 日本老年医学会: 「高齢者の終末期医療およびケア」に関する日本老年医学会の「立場表明」2012, 掲載日2012年1月28日)。https://www.jpn-geriat-soc.or.jp/proposal/pdf/jgs-tachiba2012.pdf (閲覧日2020年8月7日)
- 16) 坪井桂子: 高齢者看護の実践能力を構成する項目作成の試み。日本老年看護学会誌13 (1), 83-94 (2008)
- 17) 吉岡佐和子: 臨床での倫理調整 高齢者のエンド・オブ・ライフにおける倫理的問題にむけて。日本老年看護学会誌21 (2), 9-14 (2017)
- 18) 松木光子: 看護倫理学 看護実践における倫理的基盤。72-73, ヌーヴェルヒロカワ (2010)
- 19) 高田早苗: 看護倫理をめぐる理論。3-19, 平成15年度看護白書 (2003)
- 20) 小野晴子, 西原かおり, 伴美由紀, 小山幸子, 朝山律子, 新田幸子, 青野武史: 高齢者理解のためのシミュレーション教育の効果 学生の自己評価による一考察。兵庫大学論集23, 69-76 (2018)
- 21) 山下美智, 澤野百合: 高齢者疑似体験演習における学生の「高齢者の日常生活に必要な看護」についての学び。日本看護福祉学会誌23 (2), 145-157 (2018)
- 22) 渥美一恵, 森川三郎: 「物忘れに悩む高齢者」参加授業における「語り」の意味と影響。本看護学会論文集看護総合40, 60-62 (2009)
- 23) 塚本都子, 三澤久恵, 中澤明美, 佐野望: 認知症高齢者の意思を尊重した看護学生の共感プロセス 模擬患者 (Simulated Patient) 参加型演習の分析から。日本看護学会論文集老年看護39, 279-281 (2008)
- 24) 今野弘子: 寝たきり患者や重度の認知症高齢者の尊厳を犯さないための倫理教育の実践。東北文化学園大学看護学科紀要1 (1), 25-33 (2012)
- 25) 岡本さゆり, 古城幸子, 一ノ瀬公美, 大森交子, 谷本博香: 老年看護学実習において看護学生が感じた看護ジレンマ。インターナショナルNursing Care Research17 (3), 85-94 (2018)
- 26) 大畑政子, 原祥子: 老年看護学実習における学生の倫理的ジレンマ。島根大学医学部紀要30, 1-9 (2007)
- 27) 小野光美, 浅井さおり, 原祥子, 沼本強子: 老人看護学実習における倫理的課題に関する学習内容の分析。神戸市看護大学紀要9, 75-84 (2005)
- 28) 古城幸子, 木下香織, 馬本智恵: 老年看護学実習での学生の看護ジレンマ ジレンマの対処過程と教育的対応。新見公立短期大学紀要25, 63-71 (2004)
- 29) 佐和田重信, 永田美和子, 八木澤良子, 吉岡萌, 安仁屋優子: 看護学生が認識する在宅ケア実習施設のケアの現状と課題 パーソنفッドの観察記録の分析から。名桜大学紀要21, 133-138 (2016)
- 30) Gallagher, A: 第16章看護倫理の教育: 倫理的能力の推進。小西恵美子 (監訳): 看護倫理を教える・学ぶ倫理教育の視点と方法。241-255, 日本看護協会 (2006/2008)
- 31) 習田明裕, 志自岐康子: 看護倫理教育のカリキュラムをどう立てるか。看護展望30 (8), 880-885 (2005)
- 32) 奥野茂代, 大西 和子, 百瀬由美子: 老年看護学 概論と看護の実践 第6版。113-131, ヌーヴェルヒロカワ (2019)
- 33) 水谷信子, 水野敏子, 高山成子, 三重野英子, 會田信子: 最新老年看護学 第3版。50-70, 日本看護協会出版会 (2016)
- 34) 堀内ふき, 諏訪さゆり, 山本恵子: ナーシング・グラフィカ老年看護学①高齢者の健康と障害 第6版。189-200, メディカ出版 (2021)
- 35) 北川公子: 系統看護学講座専門分野Ⅱ 老年看護学 第9版。55-67, 医学書院 (2018)
- 36) 正木治恵, 真田弘美: 看護学テキストNICE 老年看護学概論「老いを生きる」を支えることとは 改訂第3版。50-56, 南江堂 (2020)
- 37) 太田喜久子: 老年看護学 高齢者の健康生活を支える看護 第2版。155-161, 医歯薬出版 (2017)
- 38) 川島みどり: 老年看護学 改訂版。35-43, 看護の科学社 (2015)
- 39) 亀井智子: 新体系看護学全書老年看護学① 老年看護学概論/老年保健 第5版。106-120, メヂカルフレンド社 (2020)
- 40) 島内節, 内田陽子: これからの高齢者看護学 考える力・臨床力が身につく。55-59, ミネルヴァ書房 (2018)
- 41) 大日向輝美, 稲葉佳江: 批判力の形成をめざす「看護倫理」の授業—看護実践に内在する矛盾への視点。看護展望30 (8), 886-890 (2005)
- 42) 古田知香, 三好陽子: 高齢者の看護倫理における研究動向と課題。四日市看護医療大学紀要13 (1), 63-74 (2020)

(2021年10月1日受付、2021年11月24日受理)

表 1 老年看護学における看護倫理教育に関する文献概要

文献	研究者（発行年）	タイトル	研究目的	研究デザイン
1	小野他（2018）	高齢者理解のためのシミュレーション教育の効果 価による一考察	学生の高齢者理解を促進するためのシミュレーション演習について、学生による評価を行い、改善を要する点を明らかにする	量的研究
2	岡本他（2018）	老年看護学実習において看護学生が感じた看護ジレンマ	老年看護学実習中に看護学生が感じ、体験したジレンマについて分析し、ジレンマの内容や対処過程への支援について明らかにする	質的研究
3	佐和田他（2016）	看護学生が認識する在宅ケア実習施設のケアの現状と課題 ソフッドの観察記録の分析から	パーソンフッドの観察記録を分析し、実習施設のケアの現状と課題を在宅ケア実習施設へフィードバックする	質的研究
4	今野（2012）	寝たきり患者や重度の認知症高齢者の尊厳を犯さないための倫理教育の実践	寝たきり患者や重度の認知症高齢者の尊厳を犯さないための倫理実践し、倫理観を涵養する。	質的研究
5	渥美他（2009）	「物忘れに悩む高齢者」参加授業における「語り」の意味と影響	物忘れに悩む高齢者の参加授業がもたらす学生及び当事者にとつての語りの意味を授業後のレポートとフィードノートから検討する	質的研究
6	古城他（2008）	看護学生の高齢者虐待への認識（第1報） 紙上事例を用いた横断的認識度調査	紙上事例での高齢者虐待における看護学生の認識度を調査し、老年看護学に関する教育上の課題を明らかにする。	量的研究
7	塚本他（2008）	認知症高齢者の意思を尊重した看護学生の共感プロセス模擬患者（Simulated Patient）参加型演習の分析から	模擬患者参加による認知症高齢者の帰宅欲求に関連した言動に対して共感に向かう学生の心の変化の過程を明らかにする	質的研究
8	大畑他（2007）	老年看護学実習における学生の倫理的ジレンマ	老年看護学実習で感じた倫理的ジレンマの学習内容を分析することで教育的課題を明らかにする	質的研究
9	小野他（2005）	老人看護学実習における倫理的課題に関する学習内容の分析	老人看護学実習において学生が感じた倫理的疑問とそれへの考察内容を検討する	質的研究
10	古城他（2004）	老年看護学実習での学生の看護ジレンマ 教育的対応	老年看護学実習中に学生が体験した看護ジレンマと対処過程、教員の対応を明らかにし、倫理的感受性を育てる教育方法の課題を明らかにする	質的研究



表2 老年看護学の講義・演習を通しての看護倫理教育の教育内容と教育効果

文献	対象学生	教育の目的	看護倫理に関する枠組み	教材	教育方法	教育効果の測定方法	教育効果
1	看護大学 2年生74名	高齢者の理解を促進する ためのシミュレーション演習を通して、高齢者の立場に立って考えることや、高齢者の倫理的配慮についての理解を促す	記載なし	自作の「認知症高齢者と家族に対する支援」「高齢者の身体拘束」の事例	シミュレーション演習とデブリーフィングの終了後に質問紙を記載	自作の自記式質問紙「高齢者理解の達成度・自己評価、知識の理解度、感情の共感性、参加度、演習の効果」をリカートの5段階尺度で分析	高齢者理解の達成度は平均3.5点(5点満点)であった。演習目標と有意な相関がみられたのは、「老年看護の知識理解」「アセスメント」、「事例の分析」、「患者・家族の状況の理解」、「倫理的配慮の理解」、「臨地実習に活かせる」であった。
4	看護大学 2年生76名	老年看護学の授業を通して、寝たきり患者や重度の認知症高齢者の尊厳を侵さないための倫理教育	記載なし	老年看護学総論の「高齢社会の権利擁護」、老年看護方法論の「認知機能の障害に対する看護ケア」「終末期における看護ケア」の講義	講義終了後に、質問紙を記載	自作の自記式質問紙「寝たきり患者や重度の認知症高齢者の尊厳を侵さないための関わり方」の自由記載を質的記述的分析	尊厳を侵さない関わりとして、【基本的な姿勢・態度の理解】【寄り添う、共感することの大切さの理解】【日常のケアにおいての要点的理解】【個人や家族の人生観・生活史を尊重したケア提供の理解】【環境に変化をつける重要性の理解】【エンドオブライフケアの理解】が抽出された。すべての回答が倫理観の涵養を反映するカテゴリーに該当したが、3年次後期の臨地実習評価に高齢者の尊厳、倫理観を涵養する評価項目を入れ、継続した教育的介入が必要である。
5	看護学生 194名	高齢者の対象理解を深め、高齢者へのいたわりを主体的に自分の中に取り入れていく	看護者の倫理綱領	当事者の体験談を中心とした参加授業「物忘れに悩む高齢者」	参加授業後にレポートを記載	レポート「授業からの学び、今後の自己の課題」と研究者のフィードバックの4側面「知識、技術、感情、価値観」と、課題「看護の学習者、人間、社会」に分類し、質的記述的分析	高齢者の「語り」から、その人の持っている力や創造力を知り、高齢者への尊厳といったわりという倫理の深まりが明らかになった。加えて、高齢者が思いを表出できる場の必要性を知り、一方向性の関わりではなく双方向性の関わりの重要性を考えることができた。
6	看護短期大学 1年62名、 2年64名、 3年22名	高齢者虐待の予防や早期発見が、専門職者として高齢者の人権の尊重など倫理的な課題を日常的に敏感に捉え、ジェンマを感じられる基本的な姿勢を培う	看護者の倫理綱領	西元らが作成した「身体的虐待、世話の放任、心理的・情緒的虐待、性的虐待、経済的・物質的搾取、自虐」の6場面の紙上事例	高齢者虐待に対する認識度の質問紙調査	自作の自記式質問紙「今までの生活、看護学実習の中での虐待の体験」と「紙上事例に対する虐待の認識度」を分散分析およびMann-Whitney検定で分析	学年が上がるごとに虐待事例の判断に迷いが生じ、虐待不感の傾向が見られた。今後は実習体験の意味付けを丁寧に行うなど、実習環境調整が必要である。
7	看護短期大学 2年生19名	認知症高齢者の人生や生活習慣を配慮して、その人らしさを尊重した対応ができる	サラフライ倫理原則	外部の「模擬患者ボラティア団体」のSP参加による演習「認知症高齢者の帰宅欲求への対応」	演習終了後に、自記式質問紙	自作の自記式質問紙「出会う場面での知覚」「考え・感じたこと」「自分のとった言動」「認知症高齢者への理解の変化・深まり」の自由記載を修正版グラウンデッド・セオリーで質的分析	【抵抗を感じる関わりの食い違いの自覚】「固執する帰宅意思への関わりの振り返り」「心情への接近による心の一体化」という3段階の副次的なカテゴリーを構成要素とする「帰宅欲求を表出する認知症高齢者の心情への接近」というコアカテゴリーが抽出された。看護学生が高齢者の心情に接近していくプロセスにおいて、倫理観を基盤とした「内省的思考」は、敬意を持って認知症高齢者のところを映し出し独自で寄り添う意味を探り当てる源となることが示唆された。

表3 老年看護学の臨地実習を通しての看護倫理教育の教育内容と教育効果

文献	対象学生	教育の目的	看護倫理に 関する枠組み	教材	教育方法	教育効果の 測定方法	教育効果
2	看護大学3 年生67名	体験したジレンマの内容を記載することで、倫理的問いに気付く力を育てる	記載なし	老年看護学実習で体験したマイナス面（ジレンマを感じたことと、困ったこと等）と、プラス面（感動したこと、発見したこと）を記述した実習記録	学生が体験したジレンマを実習記録に記載	記載内容の質的記述的分析	実習での体験を通じて、疑問や違和感を看護ジレンマとして抱き、倫理的問いの発見や自己の課題の明確化に繋がった。また、実習終了後にカンファレンスの場を設けることが、学生が感じた看護ジレンマを言語化し、深く思考することにつながり、感性を共有するとともに解決策を模索することで看護学生の倫理的感性・判断力の育成に繋がる可能性が推察された。
3	看護大学 4年生74名	高齢者の尊厳を支えるケアの実現には、その人らしさを尊重するパーソンセンタードな対応が重要であり、在宅療養者への理解を深め、在宅ケア施設におけるケアを観察する	記載なし	「パーソンフッドの維持観察記録」「個人の価値を低める行為観察記録」から構成されるパーソンフッドの観察記録	学生がパーソンフッドの観察記録を記載	記載内容の質的記述的分析	「個人の価値を高める行為」の記述には「能力を発揮できるようにすること」「尊重すること」「思いやり」「受け入れること」の項目が多かった。「個人の価値を低める行為」の記述には「無視すること」「子ども扱いすること」「後回しすること」などが多かった。実習施設スタッフの課題として、「尊敬や尊重する態度の必要性」「高齢者との過度なあいあい」などがあげられた。
8	看護大学 3年生53名	学生自身が経験した場面から具体的に考えを深めると、看護者として必要な倫理的判断能力および高齢者の人権と権利擁護について学びを深める	看護者の倫理綱領	体験した倫理的ジレンマ、ジレンマの状況や背景要因、ジレンマ解決のための方法、高齢者の人権擁護のために看護者に期待される役割から構成されたワークシート	学生がワークシート「高齢者看護における人権の保証」「倫理的配慮を考える」を記載	記載内容の質的記述的分析	多くの学生は「看護ケアを拒否された場面」で倫理的ジレンマを感じていた。老年看護領域の看護者に期待される役割について「自己の責任と能力を的確に認識し、実施した看護について責任を持つ」ことで、全ての看護実践には倫理的配慮が伴うことに気づき、また戸惑いながら、ケアを行う際の根拠と相手に説明できる能力の必要性を改めて学んでいた。学生が感じているジレンマを表出しやすい環境をつくり、看護状況を多角的にアセスメントできるような支援が重要である。
9	看護大学 4年生37名、 3年生39名	学生自身が経験した場面から考えを深め、看護者として必要な倫理能力および高齢者の人権と権利擁護について学びを深める	看護者の倫理綱領	倫理的に疑問を感じた例、その背景要因、倫理実践を行うための対応の3つの設問で構成されたワークシート1と、老人看護領域の看護専門職に期待される倫理的な能力を問うワークシート2	学生がワークシート「高齢者の看護ケアにおける人権の保証と倫理的配慮を考える」「老人看護領域の看護専門職に期待される倫理的な能力」を記載	記載内容の質的記述的分析	多くの学生は「看護ケアを拒否された場面」で倫理的ジレンマを感じていた。老年看護領域の看護者に期待される役割について「自己の責任と能力を的確に認識し、実施した看護について責任を持つ」ことで、全ての看護実践には倫理的配慮が伴うことに気づき、また戸惑いながら、ケアを行う際の根拠と相手に説明できる能力の必要性を改めて学んでいた。学生が感じているジレンマを表出しやすい環境をつくり、看護状況を多角的にアセスメントできるような支援が重要である。

看護短期 大学 3年生33名	看護ジレンマ日誌を記載する ことで、学生自身が看護 ジレンマを意識化し、対処 していくための方法を考え る	サラフライ 倫理原則	看護ジレンマを感じたことと 面、その時に感じたことと どうすれば良かったか考え たことを記載し、学生の感 じた葛藤を看護ジレンマと して言語化し文章に残す 「看護ジレンマ日誌」	学生が「看護ジ レンマ日誌」を 記載	水野らの倫理 教育に関する 研究枠組みを 用いて看護ジ レンマの内容 を分析	看護ジレンマは医療看護体制に関するものが85%と 大半を占め、残りが学生自身に関するものであった。 学生はジレンマを感じ考えることを対処行動と捉え ており、ジレンマを克服し評価する段階に至った者 は全体の20%にも満たないことが分かった。理想原 則の背反を問題視する傾向が推察されるため、学生 のジレンマへの理解と、状況的文脈を吟味させるこ と、カンファレンスなどで看護ジレンマを共有する ことが、他者の感性の学びや倫理的感受性を育む場 となっていたことが推察された。
----------------------	---	---------------	--	--------------------------	---	---



## Trends in research employed for teaching nursing ethics to gerontological nursing students

Ryoko HOTTA, Akane KONNO, Kayo HIRAI, Naomi YOSHIDA

### **[Abstract]**

**Objectives :** To clarify the characteristics of educational content and effectiveness as well as to discuss future issues through a literature review of nursing ethics education for gerontological nursing students.

**Methods :** We identified relevant Japanese articles by conducting a literature search in the Ichushi Web database (version 5) using the keywords “gerontological nursing,” “education,” and “ethics” to analyze educational methods and other information.

**Results :** Ten articles were identified and analyzed with respect to the publication year, study outline, study methods, educational contents and methods, and learning outcomes. The results showed that students may have developed a sense of ethics through lectures and exercises on ethics related to providing care for elderly patients during the first and second years of education and the ability to determine related ethical problems through clinical practicums during the third and fourth years of education.

**Conclusion :** Based on the basic knowledge of nursing ethics acquired in nursing education, four years of continuous education should be provided to establish learning the ethical issues specific to the elderly patients and to enhance education on strategies that tackle ethical issues..

**Keywords:** gerontological nursing, nursing ethics, ethics education, undergraduate nursing education

Department of Nursing, Faculty of Nursing, Mejiro University